

らば、サア直に馬車に乗り私しの屋敷へ行きませう』戎の顔には初て眞の満足の笑が現れた、彼れは弱い聲で云ふた『其のお志しは有難い、直にも同道したいのです、けれど最う出来ませんが、私しは今死ぬるのです、貴方がたが来て下さったから聊か心が引立て此様に話も出来ませんが、小雪と貴方の顔が見えねば最う死で居る所です、ナニ最う直です、最う直です』全く直にも死に相な聲である、小雪も守安も一時に魂消た。

(百五十二) 大團圓

全く戎瓦戎は死ぬるのである、何と小雪と守安とが嘆いても引留ることは出来ぬ。

彼れの顔には笑と共に死の影が浮んで居る、彼れは此世の仕事を仕盡したのだ、育てた娘も縁附た、自分の素性も心盡しも守安に解せられた、此上に何の心を置くことが有る。

斯る所へ醫者が来た、守安は自分の死ぬよりも猶辛い程の心配を以て容躰を聞た、醫者は一通り診察した上、守安の耳に細語いた『最う可けません』

人の死んとする時には、少しの間、常の状に還る時がある、燈火の消えんとして忽ち明くなる様な者である、戎は其時が来たのだらう、今まで椅子に凭れた儘の身が突と立ツた、併し小雪

の肩に縋つた、小雪は涙ながらに戎の杖と爲り、其の行かうとする方に従つて居ると、戎は室の隅の棚に行き小さい十字架を取り卸ろした『ア、茲に殉道者がある、無實の罪で、無言で死なれた方がある』と云ふた、眞に戎自らが殉道者である、我より先に我に優る殉道者が有たと思へば、其れが此上も無い慰藉だらう、爾して彼れは座に還つた、最う彼れすることが何と無く神々しい、人間を離れて居る。

彼れは守安に云ふた『守安さん小雪の資産は、正直に小雪の物です、不正の金では有りませんよ』彼れの最も氣に掛るは是である、守安は首を垂れた『悉く私しには分て居ます、謝します、謝します』と云ふより以上は何の語をも發し得なんだ。

此とき此家の番人の妻が、醫者に隨つて上つて來て室の入口に立て居たが、醫師から最後の命令を小聲で聞き、立去らうとして振り返り『僧侶さんと呼で來ませうか』と問ふた、人の死際を慰めるのは僧侶の役である、戎は此言葉を聞いて云ふた『其れに及ばぬ、茲に僧正が居られるから』

ア、僧正は何處に居る、誰の目にも見えぬけれど定めし戎の傍に居るに違ひない、最う彼の聖僧ミリエルが戎を迎へに來て居るのだ、戎は眞に聖僧に手を引れて居る如くに安心して居る。

彼れは靜に小雪と守安と呼び『小供等よ』と云た、最う二人は彼れの子供である、彼れは小

供に遺言するのだ、けれど其聲は戎の口から出る様には聞えぬ、遠く隔つた高い所から来る様だ、最う戎と人間との間には人間の侵すことの出来ぬ隔がある、所謂聖と凡との隔なんだ、戎は云ふた『小雪、和女に此の一對の燭臺を片身にする、是は昔し、人から貰つたのだが、銀製だ、私しの爲には黄金作よりも、金剛石を鑲めたよりも貴い、之を下さつた方は今、天に居られて、私しの行ひに満足せられたか何うだか、私しは是でも出来る丈け勉めたのだ』全く彼れは彼れ一身の力で勉たので無く、人間の力の限りを以て勉たのだ、誰が此よりも以上を望むことが出来る者ぞ、戎は語を繼ぎ『小供等よ、此の私しが貧乏人で有たことは忘れては成らぬ、貧民の様に葬つて貰ひ度い、貧民の行く墓地の隅へ、好いかえ、石碑など立て、は成らぬ、唯だ茲と云ふ記だけに石塊を一個置けば好い、序の節に花でも手向けて呉れるなら満足だ、小雪、小雪、和女の母の名は華子と云た、和女が今幸ひであると同じほど不幸な分量を持って居られた、和女の身に幸ひの來たのも、其母が不幸に堪へた酬だらう、誠に天の成さることは公平だ、苦しめば必らず幸ひが來る、和女は華と云ふ言葉を用ふる度に、尊敬の心を以てせねば成らぬ、爾も無くは親に孝行と云はれぬ、サア二人とも茲へお出で』

兩人は先程から首を擧げることも得せぬ、涙を雨ふらせて泣て居たが、其まゝズツと戎の傍に寄つた、戎は二人の頭に片手づゝ置き、撫でながらに此世を去つた、活て笑顔と云ふ事の無い

身みで有あたけれど、死し顔がほは天てんの光ひかりを受うけて輝かいて居ゐる、此これが人間にんげん以上いじやうの大だい往わう生じやうと云いふ者ものだ。
斯かくの如ごとくにして戎ぢやんは亡なき人ひとの數かずに入いつた。

彼かれは遺言ゆいごんの通とほり、目め立だたぬ所ところへ目め立だたぬ様やうに葬はなむられた、ピヤ、ラチエースの墓ほち地の片隅かたぐみに石いし
塊ころもがある、人ひとは知しらぬが是これが戎ぢやん瓦ぼろちやん戎ぢやんの墓ほかだ、何なに者ものか其その石いしに鉛筆えんぴつを以もつて左ひだりの句くを書かき附つけた、
けれど間まも無なく雨風あめかせに拭ぬぐはれて讀よむことも見みることも出で來きなくなつた。

彼かれ眠ねむる、憂うれき節ふし繁ふけく生いきたれど彼かれ死ししぬ、最いとほ愛ほしの者ものを失うしなひてされど恨うらみず

安やすらけく

日ひの往ゆくあとに夜よの來くるがごと

噫無情 (大尾)